

孫曉燕 氏/孙晓燕 女士

孫平化日本学学術奨励基金管理委員会 副主任（中国日本友好協会元会長孫平化氏ご息女）

/孙平化日本学学术奖励基金管理委員会 副主任（中国日本友好協会 原会長 孫平化先生之女）

日 時 : 2022 年 3 月 15 日

時 間 : 2022 年 3 月 15 日

場 所 : 北京市内

地 点 : 北京市内

使用言語: 日本語

使用语言: 日文

聞き手 : 野口裕子

采访者 : 野口裕子

（国際交流基金北京日本文化センター）

（北京日本文化センター（日本国際交流基金会））

## 【目次】

1. 父（孫平化氏）の思い出
2. 下放生活・日本語との出会い
3. 通訳者・翻訳者として
4. 国際交流基金賞と孫平化日本学学術奨励基金

(1)孫平化日本学学術奨励基金の設立経緯

(2)孫平化日本学学術奨励基金の運営

## 【目録】

1. 回忆父亲孙平化
2. 下乡/相遇日语
3. 作为翻译
4. 日本国际交流基金会奖与孙平化日本学学术奖励基金

(1)孙平化日本学学术奖励基金的设立经过

(2)孙平化日本学学术奖励基金的运营

## 【本文】/【内容】

### 1. 父（孫平化氏）の思い出/回忆父亲孙平化

父の故郷は東北なんですけれども、1932 年から満州国になってしまいました。父はその満州国の国費留学生として日本留学をして、日本では色々、抗日活動に参加して、帰ってきてからもずっと東北や各地で反日闘争をしていました。その時は、同じように留学して、共産党の立場から地下活動をやるという経験をした対日工作の人たちは非常に多いです。例えば趙安博先生、王曉雲先生、肖向前先生。皆さんほとんど同じような、あの時の経験者です。

父が北京に入ったのは 1949 年の 5 月あたりでした。10 月に新中国ができて、それからずっと北京で仕事をするようになりました。母と結婚したのも 1950 年。1952 年 4 月に、日本の国会議員の高良富さんなど三名がヨーロッパでの平和大会に参加した帰りに中国へいらっしゃって、父がその時、臨時に、「日本留学を経験したから、まあ対応しなさい。」というようなことで、お手伝いしました。その時、父と同じように肖向前先生とか劉徳有先生もいらっしゃいました。

ただし父は留学の時に反日という立場でしたので、あまりしっかりと日本語を勉強することはなかったらしいです。それで最初、飛行機で日本のお客様と日本語で喋ったら、相手が全然分からなかった。それで外交部の有名な英語通訳の冀朝鼎先生がしょうがなく入って英語で説明して、やっと通じました。それが父の対日工作にかかわった始まりなんですよ。

それから 52 年には北京飯店で世界平和大会がありました。その後、父たちは対日の仕事を正式に始めたわけです。

それからは、中日関係は、国交もなくいろいろな複雑な問題もよくあったりして、とても忙しくて、普段は週に1回家に帰ってきますけれども、忙しい時にはどこに行ってるかも分からないという状態なんですよね。

それと私は、1歳半から全寮制の幼稚園に入りました。1ヶ月に1回、家に帰ったらしいですよ。あの時の北京、あの世代仲間達もみんな同じですけども、女性の地位を高めるとかいろんな要因がありまして、共稼ぎが多くて。それで我々は家族で生活するよりは集団生活で育ちました。母親より幼稚園のアーイー（注：保育員）さんと親しくなって、母のこと「アーイー」と呼んだりしてですね（笑）。

父は、例えば祭日とかみんなが休む時にこそ忙しいですよ。国慶節とかメーデーとかも、全然、家へ帰られない状態。それでやっと家へ帰りましたら、一緒に遊びに行きますよね。例えば京劇。あの時、『楊門女将』っていう京劇が映画化された時で、カラー映画でした。わざわざ連れていってくれるんですけど、私は眠くて。父は非常に京劇が好きですので、よく眠ってる私をこう叩いて、「ほら、物語はこうだ」というふうに。

うちには日本語の本もあったような覚えがありませんし、父は全然、仕事じゃない時には日本語話したくない、まあ疲れてるからとかいう感じなんですよね。

父は1964年から日本に駐在しました。翌65年から母も行きました。我々子供3人はそれぞれの学校に入って、2段ベッド生活ですよ。私は北京の紫禁城の西華門あたりにある北京第一女子中学というすごく古い学校に行きました。李太釗先生が民国時代に作られた女子学校で、入ってみると親が外交部系の子が多かったです。みんな、親が海外駐在しているから親がいない。2段ベッド生活は、いろんな友達みんな同じ運命ですので、かえって面白かったところも非常に多かったですよね。文革までは。

1966年夏には文革が始まって、学校が全部休みになりました。それで（注：「革命大串聯（経験大交流）」の名の下、全国の学生が交流することとなり、北京の学生が地方に行く時には汽車の運賃は無料となり、地方の学校に無料で宿泊したり食事をとったりすることができるようになったので）みんなと楽しくあちこち列車の旅行をしました。あの時14歳で、仲間と自転車で行ったところもありました。母が涙を流して心配していたんですけども、父は、「まあ、しょうがないから」とか。

父たちが中国に帰れたのは文革の真っ最中で、香港から広州に入って、その時からいわゆる造反派に管理されながらまる五日間で北京にたどり着いて、そのまま「学習班」に入れられました。そういうような状態でしたので、それからはずっと、父とは一緒ではありませんでした。1969年に私が下放される時も、父はまだ「学習班」で出られない状態でした。でも、管理者に言って、荷づくりのために家に帰ってきて、荷物を作って、相当大きい木の箱みたいなものを学校に自転車で運んで、それからバイバイと。（父の外出は、荷造りをして学校に運ぶ日か、駅への見送り日か、いずれか一回しか認められなかったの）北京駅から列車で出発する時、周りはみんな家族全員が見送りに来ていましたが、うちだけは母だけでした。私はなんか、あの時のことはあまり覚えてないですよ。心理学には「選択忘却」という説があるようで、もしかしたら自分はそうかもしれないです。

今、仲間に聞いたのは、北京から24時間かけて西安へ、また西安で乗り換えて2時間で銅川、そこでどこかの学校の教室に泊まって二晩後に今度は軍のトラックで10時間山道を行いました。そこからまた

15 キロぐらい歩いて延安というところにつきました。両親とは手紙で交流するだけなんですよね。ですから、私が小さいときの父の思い出はそんなにないんですね。

## 2. 下放生活・日本語との出会い/下乡/相遇日语

生活は一時的に非常に自由でした。うるさい先生もいないし親もいないし、自由とも乱暴とも言えるぐらいでした。16 から 21 歳ぐらいの少年少女や青年たちが自分の判断で、社会の中で生活してたわけです。

延安というところには北京からの下放青年と言われる中学、高校生 2 万 7000 人が行ってたんですけれども、とてもご迷惑でした。要するに非常に貧困なところでしたので。しかも数年連続の旱魃で、とてもあそこの土地はこれだけの人口を養えないんです。農民達は、昔の八路軍を歓迎するという伝統もありまして、大歓迎でしたけれども、(実際は)非常に迷惑でした。下放青年たちも、いきなり親や学校の先生から離れて、食べ物が足りない状況で、何もわからないまま、土石流などの災害の中で原始状態の農作業をして三食作って生きていくという勉強をすることになってしまいました。それで、色々説明をしたら、政府としては、1 年後から、北京に帰るのではなくてほとんど西北地域でしたけど、色々な工場とかに(配置転換されるようになりました。)同じ人民公社には全部で 270 名ぐらいいて、そのうち女の子が 90 名でしたけど、1972 年の上海バレエ団訪日の時には、30 名しか残ってなかったです。いわゆる政治審査が不合格の子が多かったです。女の子は私 1 人だけ。私は 5 年目に入ってしまいました。それで、「この子の泣いた顔は見たことない」というのが有名でした。

あの頃、毎日、有線放送がありまして。上海バレエ団が北京を出発する日に、私は野良仕事、トウモロコシの草取りをしてました。「孫平化が上海バレエ団をつれて日本へ出発した」と聞いて、私は、「还有人想叫孙平化呀，多倒霉啊。谁都这么不怕倒霉(注：まさか孫平化なんて名前の人がいるなんてね。こんなについてない人も珍しい。)」と(笑)。自分の家の孫平化と思わなかったんですね。

外語大に入れたのはそれから 1 年後でした。私みたいに中学校 1 年で文革になった年齢の人は、外国語を生かしたいですよ。北京外語大から私の県に試験に来た先生は漢語の先生でした。ですので、地元の学校のすごく年取った英語の先生が試験に出て来て、私に聞いたのが、『毛沢東選集』毎日勉強してるか』と。英語で「Do you study…?」とか何とか。私の英語は中学校 1 年の、しかも非常に非常に簡単な英語ですので、すごく心配してゆっくり考えて、長く喋るとボロが出るから、一言で「Certainly.」で終わったんですよ。あの漢語の先生がすごく感心したらしいですよ。

それから、後から分かったんですが、もっと彼が感心したのが、夜、長距離バスで県にたどり着いて降りてきたら、農民の真ん中に私が 1 人ぼっちになってしゃがんで、村人たちとすごい方言で話し合ってたんですよ。こういう方言を喋る能力があるなら外国語には良いでしょうと印象に残ってたらしいです。

で、先生に「何を勉強したいですか?」と聞かれて、私は「北京にさえ帰れば鳥の言葉でもいいです」と。何語でも本当に、みんな冗談によく「鸟语都行(注：鳥の言葉でもいい)」とか言っていました。それで学校に入ったら、「日本語に行きなさい」と。その時から「あいうえお」を始めたわけですよ。

その時、孫平化はもう政治的には問題はやっとなくなっていましたし、北京に帰ってこんな都市生活ができたのがすごく運が良かったとありがたく思いました。しかも私より早く村を離れた人には、むしろ

学校には入れなかった人がすごくいるんですけれども、私はこんなに学校にも入れたということなので、もう勉強は嫌じゃなくなって、何語かに拘らずに勉強するようになったわけです。

### 3. 通訳者・翻訳者として/作为翻译

大学を出てから、あの時、中央編訳局で『毛沢東選集』第5巻の翻訳をされていて、私もまたそこに、自分で選ぶというよりは行かせられたんですよね。「配分（フェンペイ。注：国などが就職先を決めること）」ですよね。要するに『毛沢東選集』の翻訳なんですよね。

そこで働いていた1979年、中国教育部から新中国設立以来初めて海外に留学生を派遣するようになりました。日本への第一期生は20名で、中央編訳局に1名の枠があるとのことでした。早稲田大学の中国文学の教授、北京大学客員教授で、『毛沢東選集』第5巻の日本語版翻訳出版の指導専門家でいらした安藤彦太郎先生と、夫人の安藤陽子先生のお陰で、私は運よく早稲田大学語学教育研究所に1年間留学することになりました。これは私の日本理解にとって大変貴重な経験でした。その期間中、1979年8月の夏休みには、国際交流基金の「海外日本語教師研修」に参加しました。そして、1年後、中央編訳局に戻ったのです。

中央編訳局では翻訳とは何か分かりました。と同時に、元華僑の先輩がすごく多いんですので、普段は日本語で話し合うことも相当多いわけです。しかもみんな綺麗な日本語で。それと、全人代などの翻訳もしまして、日本人学者の川越敏孝先生とか、いろんな素晴らしい立派な先輩とのお付き合いがありました。

その間に翻訳や通訳も少しは勉強して、数年後にそこを離れてCITICに入りました。改革開放の金融交流の中での通訳とか非常に多かったんです。ほぼ10年間経って、自分で翻訳会社を作りまして、いろんな方面の交流の通訳をしました。それでまたさらに貿易保険の会社に入りました。通訳としての経験としては、改革開放が印象的でした。

私の仕事は父と一緒にすることはそんなにはなくて、仕事としてはずっと離れ離れでした。ただ父を手伝うことはあります。何か書くこととか、一緒にお客様に会うこととか。それと、父との付き合いで日本関係の話が多いわけですね。廖承志先生が亡くなってから、父は日記を書いていたんですけど、父が亡くなってから、孫平化基金とか資料の整理とか、それを読んだりするのが、私は他の兄弟より割合に理解が早いとかいうことなんですよ。むしろ、そういう作業を通じて父を理解しているというような感じが強いんですよ。だから、例えば上海バレエ団の話はむしろ経験者に聞くだけなんです。

### 4. 国際交流基金賞と孫平化日本学学術奨励基金/日本国际交流基金会奖与孙平化日本学学术奖励基金

#### (1) 孫平化日本学学術奨励基金の設立経緯/孙平化日本学学术奖励基金の设立经过

私は以前、国際交流基金の「海外日本語教師研修」に参加したことがありまして、いろいろな場で通訳をしていましたので、当時の国際交流基金北京事務所の小熊旭所長とお付き合いがありました。1997年の初め頃かもしれません、小熊さんから「今年は日中国交正常化25周年だけれども、国際交流基金賞というのがあって…」というお話を伺いました。受賞すれば中国人で初めての受賞者になるということや、賞金の説明などもありました。ただ父がもう相当、重体になっていましたので、「どうでしょう…」と言いますと、「その時、その時で相談しましょう」というようなお話でした。

そして7月になって、阿南（惟茂）公使ご夫妻が病院にお見舞いにいらっしゃって、父は「阿南さんが来てくれた」と最後の日記を書いてから、そのまま寝ついてベッドを離れられなくなりました。病院からは「危篤状態になった」といわれましたので、すぐ小熊さんに電話しました。すると小熊さんは翌日に25輪の赤いバラの花束を持ってこられました。ベッドの前で「老孫（ラオスン）」と呼びかけて、国際交流基金賞は今年は孫平化先生が受賞してると。ルールとしてはその日にならないと発表できないでしょうが、既におそらく本部の方とも相談した上で、伝えてくださいました。それで父がちゃんと「ありがとうございます」と言いました。

それで私はただちに、北京日本学研究中心に連絡しました。北京日本学研究中心には孫平化日本学奨励基金というのがありまして、以前、父が日本の勲一等を受章した時のお祝いなどのお金をそこに置いてたわけです。それで今度も厳安生先生と相談したら、北京日本学研究中心では基金の運用は困難だということで、やはり基金を探さなければならない。中国で国レベルの基金として宋慶齡基金会がありまして、対外交流をやっていたので、私はたまたま知っていました。そこで相談したら、その時の主席は黄華さんです。元外交部長で（日中）平和友好条約のサインをした外交部長なんですよね。すごくピンとききました。父に話しますと「ああ、『廖公』の所ですか。」と。廖承志先生も宋慶齡先生とすごく親しいようで、一番最初の名誉主席も務めたことがありましたから、そこがいいじゃないですかとような話でした。

私はただちに公証処に行って手続などを全部しました。厳安生先生、徐一平先生、宋慶齡基金会の方々にもみんな集まっていたいて、父の状態は悪かったですけれども、「はい、分かった」ということぐらいいは言って、「孫平化」という字も非常にバランス取れなくなっていて、20分間位かかってですね、そうだって本当に涙が出ますけれども、頑張ってサインしました。それでも内容はちゃんと分かったと、そして私が父にキスをして、それで（孫平化日本学学術奨励基金が）できたわけです。

基金には、国際交流基金賞の賞金のほか、日本経済新聞の『私の履歴書』の原稿料、日本での追悼会や中国の対外友好協会に設けられた「霊堂」に皆さんがお持ちになったお金、個人の寄付なども含めました。勲一等の時のお金も北京日本学研究中心が寄付者の一人としてここに寄付してくださいました。個人は、例えば華僑総会の陳焜旺先生は、お見舞いに来てくださった時に「お金ためてるから一緒に香港見に行きましょう。97年以後。早く退院して香港に2人で旅行に行きましょう。」と。それで、行けなかったなのでその旅費を寄付すると。全部で、当時のレートで人民元100万元ぐらいになりました。

父は亡くなるまで定年してないです。80歳までずっと仕事をしていましたので、休んでゆっくりと勉強する暇がありませんでした。日記にも書いてありますが、その時々の日中関係に左右されるのではなく、冷静に研究して中日関係を判断し、これからの行き方と考えるべきだと考えていました。（日中関係が良いときは）「友好」っていうだけで、関係が悪くなって喧嘩したらまた「全て良くない」というようなことよりは、次の世代はむしろ冷静に研究する必要があると。

特に学術とは何かというような言われたことはあまり記憶がありませんけれども、父は、中日関係が良くない時には、どういうわけか、いろいろ相談されました。晩年になるほど多かったです。日本に一番文句言って怒ってるのは父なんですよね。日本の愛知大学での講演の記録も残ってますし。でも、なぜか日本人には反感持たれてないっていうか。うちの父は毎日しっかりと新聞を勉強しますよね。いろいろ理

解した上で、判断するということなんです。

後から私が聞いたところでは、廖承志先生も同じようだったみたいです。廖承志先生はすごくいろんなものを読みます。仕事のグループ達はみんな、それぞれ一部分分担して読んでるのに、まだ廖承志先生ほど行かないと。うちの父もそのグループの1人で、本当にやはりそういうのを見てるから。

## (2)孫平化日本学学術奨励基金の運営/孙平化日本学学术奖励基金的运营

基金を作ってから運営は、本当に並々ならぬものでした。みんなの努力でここまでなってきました。私は全過程を経験した一番の感想は、本当に中国語で「很不容易（注：容易なことではない）」です。お金の運営は宋慶齡基金がやってくださいましたが、お金だけの問題ではないですよ。学術奨励賞として、皆さんに認められるというのに10年間ぐらいいはかかりますね。論文の審査などは北京日本学研究中心が分担してくれました。これらの方々の中で、特に、嚴安生先生と劉徳有先生がいらっしゃらなければ、本当にここまでできなかったと思います。

私は印象深く覚えています。劉徳有先生は、まず若い人、50歳以下を対象にするとおっしゃいました。次に文科系で、中国に所属先がある人。そして劉徳先生が強調されたのが、「中国の文化に基づいた日本研究」ということでした。アメリカにはアメリカの文化に基づいた日本学があります。今、中国の日本学研究はまずは日本語で始めて、それで日本に留学して、日本の研究者について、それからどうしても自分の日本学研究ではなくて、日本の日本学研究の「支流」になってるわけです。中国の文化は2000年もありまして、その自分の文化に基づいた日本研究をしたいと。これが、劉徳有先生が一番最初の時に出したいくつかの原則なんですよ。

最初は年に1回（行おうとしたんですが）、嚴安生先生が「そんなには作品がたまらないですよ」と。それじゃ2年に1回、これもまたすごく慌ただしい。で、3年にゆっくりと1回やるというふうになりました。

やってるうちに色々ルールを作るわけですよ。例えば審査委員会の人は推薦者になっていけない。推薦者はちゃんとした教授とか、研究者の背景を持ってる人たち。お役人はだめ。要するに中国では、教授か副教授、研究員、副研究員に昇格するため、入賞歴が欲しい人がいますよね。そうすれば、正しい研究ということよりは、早道でどっかへ行ってしまいうんですよ。それはあのやはり…。

私が一番頑張ったのは、全部公開すること。国家税務局の免税のお知らせや、審査が終わりましたらその結果をちゃんと毎回、（中国社会科学院）日本研究所とか北京日本学研究中心とか、皆さんのホームページに全部出して、10日後に異議がなければ成り立つとかというふうに発表すると。

もう一つは、私は審査委員には絶対ならない。教授の肩書がないから。自分はただ通訳でしたので。どういう仕事でもやりますけれども、審査会議の時に発言しません。投票の時には権利がない。劉徳有先生にも投票権がなかったですね。それで、一番最初は嚴安生先生、北大の嚴紹盪先生。ほかには、例えば北大の王曉秋先生。例えば李薇先生。亡くなった歩平先生。みんな日本学研究では中国でトップの人たちですよ。こういう中国一流の学者が、喜んで、孫平化を尊敬する気持ちと、この正しいやり方をいいと思う、こういう地味な学者達が、みんなに本当にただで貢献して。毎回お礼を言う時に皆さんは、「これは『大家的事情（注：みんなのこと）』だから」と。ですから、みんなでやりましょうというような皆さんのご態度に、非常に感動します。しかもちゃんと時間を使って、先輩の立場から若者に対してどういうふ

うに研究したらいいか、皆さんの評価をするわけですよ。毎回、表彰式では、なぜ一等賞に誰誰か、なぜ二等賞、その意見をちゃんと北大の嚴紹璽先生が自分で会議で発表します。本当に丁寧に。8 回目は、嚴紹璽先生がお年取って、老人ホームに入られました（けど、わざわざ出席してくださいました）。郭連友先生とか、若い先生が管理委員会に入ってから、非常にまた活力が生まれて、非常に良かったですよね。

それと、第 1 回、第 2 回の受賞作の共同筆者（注：宋金文教授）が今、日研中心主任なんですよ。また、第 1 回の入賞者の 1 人は外交学院の副院長になってる江瑞平先生。いろんな、特に学校の日本学部とか研究室のリーダーになってる人が相当多いです。それと今は審査員という人もいます。対象が 50 代以下ですのでもまだ若いですよ。その内容もいろいろ、内容が広くて、活発になってるんですよ。（所属先は）研究所が少なくて大学が多いです。チベット大学がいないぐらいですよ。貴州大学まで参加して、しかも入賞するんですよ。広西大学は広西大学出版社も出版します。最近の 2 回は、清華大学、北京大学、南開、復旦、全部、当校だれだれが孫平化賞入賞したと、各ホームページに出しました。また天津出版社は自分のホームページにうちの出版物は入賞したと、いろいろそういうことをやりまして、非常にいい方向には行くようにはやっとなってきました。

（ここまで続けられたのは）宋慶齡基金会の資金上の支持が非常に大きいです。元金が少ないから、毎回足りないんですよ。それで宋慶齡基金が足りない部分を全部出してくれると。宋慶齡基金会だから免税対象になります。それから、1997 年にできた時には、中国にはまだ社団管理が法律上まだ弱くて、社団がすごく多かったんです。その後、民政部がまとめてだんだん管理するようになりまして、2 回、大幅に整理したことがありました。でも宋慶齡基金会だけは 2 回とも残っています。今、（宋慶齡基金会の関係で）残ってるのが孫平化学術基金と子供の医療学術基金。後は宋慶齡先生と関係の深い子供の少年少女文学とかですよ、この三つしか残ってないです。やはり学術を正しくやってるから、社会や政府に認められるわけです。宋慶齡基金会の努力があったので、あの元金 100 万だけでここまでやったわけですよ。お金の問題ではないです。

もう一つ、北大の嚴先生のおっしゃってることは非常に大事なんですけれども、個人のお金でこういう外国研究の学術賞を作っている例は、今、中国にはあまりないです。確かめたことがないですけども、嚴先生は絶対これだけと言ってる。あまり宣伝物とかには書いてないけれども。確かに、例えば英語畑とか他の言語のみんなに羨ましがられると嚴先生もおっしゃってるんです。ですから本当に大事にして、いくら無理なことがあっても、毎回ちゃんと、表彰式に出ます。表彰式は、毎回、「東京 - 北京フォーラム」とか、例えば日本の村山元首相とかご来訪の時に、やります。それで中国の方からも黄華先生とか雷潔瓊（注：全国人民代表大会常務委員会副委員長）先生とか、唐闻生（宋慶齡基金会副主席）先生とか出席してくださるわけですよ。そうすれば若い人だって非常に光栄に思ってさらに学術研究をします。

もう軌道に乗ってるから、これからは割合に心配しません。父の遺言で私は代表ですけど、例えば私がいなくなっても、私の後は自分の家族の中で指名する必要がなくなりまして、もう社会にお任せしてみんなのものにしたいですよ。さらに、私の夢は、例えばどこか企業とか社会からお金が入って「中国日本学研究基金」になることです。孫平化は歴史にちょっと沈ませてやった方がいいと思います。まあ中国と日本は、ああいう不幸せな戦争があったので、中国の企業に寄付して欲しいと説明するのは、他

のとは非常に違う点がありますので、むしろまずやって見せて。それで今は社会の認知度もあって、一番いい状態。もし拡大できれば、日本からの留学生への奨学金があればいいなと、私こっそりと夢も見てるんですけど。

日本の皆様には、孫平化基金がちゃんと頑張ってるということを知っていただきたいです。何があっても、今の中日関係のために何か書くというようなことは、一度もやりなさいとは言っていない。まあ書いてれば非常にいいことですけれども、わざわざ一つのテーマにしてやってるということはしてなかったわけですね。やはり今日、経済、文化、歴史、各方面から皆様の研究で社会に出して、それにさらにその上で皆様が判断をすればいいんじゃないかと思います。

公開：2023年6月1日

複製・編集を禁じます  
禁止复制编辑文稿内容